

# 日 本 語 1

加納千恵子 長谷川守寿 酒井たか子 小林典子

## 要 旨

「日本語1」は、150 時間程度の初級既習者を対象としており、非漢字圏学習者と漢字圏学習者が混在している 10～20 名程度のクラスである。75 分授業を週 7 回、10 週間実施している。コースでは、『Situational Functional Japanese』Vol. 1～Vol. 2 を使用し、日常的・具体的な話題について日本語でコミュニケーションができるようにすることを目指している。聞き取りの練習、ひらがな、カタカナ、簡単な漢字の読み書き練習、速読練習なども行っている。コースの終わりには、筆記試験、聞き取り試験だけでなく、習った文型や表現を使った少し長い会話の発表も行う。グループ活動などを授業に取り入れ、学生の自律的学習の態度を引き出すことによって学習効果をあげることが指導のポイントであろう。

【キーワード】 初級既習者、コミュニケーション、グループ活動、自律的学習

## Japanese 1

KANO Chieko, HASEGAWA Morihisa, SAKAI Takako, KOBAYASHI Noriko

【Abstract】 “Japanese 1” is a beginners' course of Japanese for 10 to 20 students with and without kanji background, who have already studied approximately 150 hours of Japanese lessons. There are 7 classes of 75-minutes per week for 10 weeks. The classes focus on improving the students' grammatical knowledge as well as communicative skills, such as oral communication, listening comprehension and reading comprehension in Japanese, using the main text “Situational Functional Japanese” vol.1 & 2. At the end of the course, the students are required to take not only a written and listening test but also to perform oral presentation consisting of a relatively long conversation. For getting good learning results of communicative skills it is thought to be essential to encourage group work and foster learner autonomy in the class.

## 1. コースの概要

日本語補講「日本語1」は、75分授業を週7コマで10週、全部で約87時間のコースである。登録者数は毎学期10～20人程度で、非漢字圏学習者も中国・韓国の学習者も混在している。テキストは、『Situational Functional Japanese』Vol. 1の後半とVol. 2の前半(5課～12課)を使用している。また、聞き取り練習用に『わくわく文法リスニング』を主教材の進度に合わせて適宜使っている。学期中に4回の小テスト(L1～L4、L5～L6、L7～L8、L9～L10)と、最後に期末テスト(L1～L12)と会話の発表を行う。宿題としては、各課のGrammar Check 8回分(L5～L12)、Sentence Writing 8回分(L5～L12)、Review Sheet 12回分(L1～L12)、補助教材『SFJの読み書き』<sup>(1)</sup> 8課分を課している。成績は、小テストの平均を30%、期末テストの結果を30%、宿題の平均を20%、会話の発表を20%として計算してつける。

## 2. コースの目標

「日本語1」コースは、日本語を150時間ぐらい勉強して、ひらがなとカタカナをマスターし、基本的な漢字100字程度が読める学生のためのコースである。コースが終わった時には、以下のことができるようになることを目指している。

- (1) 『SFJ』のL1～L12で紹介される、日常的で具体的な話題についてコミュニケーションができるようになること
  - 1) 挨拶して自己紹介する
  - 2) 郵便局で手紙を出す
  - 3) レストランで注文する
  - 4) 場所を聞く
  - 5) わからない言葉を聞く
  - 6) 事務室でやり方を聞く
  - 7) 電話で予約する
  - 8) 許可を求める
  - 9) 病院で診察をうける
  - 10) 買物をする
  - 11) 本屋で本をさがす
  - 12) 道を聞く
- (2) 『SFJの読み書き』1課～8課で練習される、簡単な日本語の文を読んだり書いたりすることができるようになること
- (3) 習った文型や言葉を使って、少し長い会話をすることができるようになること

### 3. 授業の進め方および特徴

受講生には、補講のオリエンテーションでスケジュール表を渡して、授業の進め方、テキスト、音声テープの使い方、宿題などについて説明を行う。

150 時間程度の日本語既習者を対象としているため、最初の 5 回の授業で、『SFJ』L1～L4 の学習項目のクイックレビューを行い、ひらがなの基本的な読み書きのチェックを行った後、L5 以降から本格的な授業に入る。ほぼ 6 回の授業で各課を終えるようなペースで授業を進めている。

1 回目：Structure Drill および聞き取り練習

2 回目：Structure Drill および聞き取り練習

3 回目：Structure Drill および聞き取り練習

4 回目：Model Conversation の DVD 視聴および会話ドリル

5 回目：Role Play および Tasks and Activities

6 回目：SFJ の読み書き

授業の進め方としては、まずテキストの Structure Drill を使って、文型、文法の確認をしつつ、口慣らし練習から徐々に学生が自分で言いたいことが言えるような練習につなげていく。その後、学生にとって必要と思われる場面での会話練習に進み、課の終わりにはロールプレイやタスクができるようになっているかどうかによって達成度をみる。授業は口頭練習を中心に進むが、習ったことを記憶に留めやすくするために、読み書きクラスでは読みの力の強化を図る。宿題として、各課で予習確認のための「Grammar Check」、習った文型や語彙の用法を定着させるための「Sentence Writing」、課ごとの復習のための「Review Sheet」を課している。

クラスの特徴としては、いろいろな国の学習者、若い短期留学生から大学院進学を目指す研究生、時には研究者までが混ざっており、このレベルとしては比較的大きいサイズのクラスであることが挙げられる。したがって、1 人 1 人の学生の授業参加度がどうしても低くなるため、学生同士でペアを作らせたり、グループに分けたりして、コミュニケーション・ギャップを使った練習やタスクをさせる必要がある。また、個人差はあるが、日本語の初歩的な文法的知識については既習であるが、実際の場面での運用力が低い、あるいは知識そのものが不正確である、などの問題を抱えている者が多いため、既存の知識を活性化させつつ、実際の日本語運用のスピードや自然さを身につけさせることを目指す点が、いわゆるゼロ初級者に対する授業と異なる点である。以下にその授業の進め方の上での工夫例を示す。

#### 3-1. 構造ドリルおよび聞き取り練習

このクラスには私費の留学生も多く、教科書を先輩などから譲り受けているケースがあり、教科書に答が書かれていたりすることもある。そこで、教科書を使ってドリルをした後、特

にしっかり覚えてほしい文型や表現などは、教科書を閉じさせ、絵パネルだけで、覚えるまで繰り返し徹底的に練習している。聞き取りの練習も同じである。文字を見なくてもできるものは、できるだけテキストを閉じ、音声だけで行っている。

クラスが2コマ連続している日にドリルが続く時には、どうしても後半、集中力が落ちてくる。そこで、椅子に座ってやる簡単なストレッチの時間をとっている。9課に出てくる「肩、首」などの身体の部位に関する語彙や、12課に出てくる「右、左、前、後ろ」などの言葉を使って、そのずっと前の課の授業の時から、日本語で指示を出し、身体を動かしてもらっている。はじめのうちは恥ずかしがってか、なかなか身体が動かなかった学生も、コースの後半になると、慣れてきて抵抗なく指示通りに身体が動くようになる。

### 3-2. 会話ドリルおよびタスク活動

会話ドリルやロールプレイ、タスクにおける会話練習では、国や母語が多様な学生が比較的多く集まっているという点を利用して、できる限り異なる背景の学生同士でペアやグループを作らせ、お互いに知らない情報のやりとりを自然に取り入れながら、文化的な視点も含めた練習をさせるようにしている。たとえば、1課の挨拶の場面では「おはよう」や「こんにちは」を言う時間帯の捉え方、9課の医者と患者とのロールプレイの際には患者から医者に向かって「お元気ですか」と挨拶をするかというような話題、10課のデパートの場面では、エレベータ嬢の有無や、日本の店員の丁寧すぎる態度などが文化的な違いから興味深いディスカッションの題材となり、日本文化の理解に繋がることも多い。モデル会話のDVDの映像からも、お辞儀の角度、指のさし方、視線、笑い方など、ノンバーバルなコミュニケーション手段について様々な情報が得られる。

教科書にあるタスクについては、学習者の日本語力の違いにより、時に応じてタスク自体の選択や重点のかけ方を変える必要がある。また、その課のタスクをただ終わらせることを目標にするよりは、資料として発展的に利用するという使い方の方が生かせるタスクもある。薬の説明書の読み取りや申込書を書かせるようなタスクでは、漢字圏と非漢字圏の学生をペアにして行わせたところ、上手に助け合いながら、課題を達成していた。

### 3-3. 読み書きクラス

このコースをとる学生にとっては、漢字のクラスはオプションになっており、ともすると口頭練習が中心となって読み書きがおろそかになりがちであるが、さらに上のレベルに進むためには、技能のバランスも重要であり、また読みによって習った文型や語彙が定着することも多い。そこで、週に1コマ(75分)、留学生センターで作成した副教材『SFJの読み書き』Part1を使って、ひらがな、カタカナ、易しい漢字を使った読み書きの時間をとっている。プレースメントテストに合格してコースに入ってくる学生は、ひらがなの読み書きはほぼ大

丈夫に見えるが、ディクテーションをさせると、特に漢字圏の学生の中には、拗音・長音の聞き取りの不正確さや清濁の混同などが多く見られる場合も多いため、一応クラスで確認している。

また、漢字圏・非漢字圏を問わず、このレベルではカタカナの読み書きが弱い学生が多い。『SFJ』では、1課の自己紹介のところで人名と国名、3課のレストランの場面でメニューに載っている多くのカタカナ語が紹介されるため、それらの語を中心に、カタカナの読み書き練習にも力を入れている。特に、漢字学習をも目指す非漢字圏学習者にとっては、漢字の一部から作られたカタカナの筆順や字形のとり方をこの段階でしっかり覚えておくことが後の漢字学習の際の字形記憶にも役立つので、書き方も丁寧に指導している。

漢字については、特に書き方は指導しないが、初級段階でも見る頻度の高い基本動詞や形容詞の漢字の読み方、送りがなの付け方、訓読みされる場合と音読みされる場合の見分け方など、日本語の表示や簡単な文章を読む上で必要な表記上のルールを教えることに主眼を置いて、読み練習をしている。

1学期 10 週間のコースであるが、最後の週は期末試験や発表に使われるため、コース中にとれる読み書きクラスは 8 回程度であり、以下のようなシラバスで指導を行っている。

- 1 課 ひらがな語の認識練習から漢字語にふってある振りがな読み練習
- 2 課 『SFJ』 1・2 課のカタカナ語の認識練習、読み練習
- 3 課 『SFJ』 3 課のカタカナ語の認識練習、前の課で習ったカタカナ語の書き練習、文のディクテーション
- 4 課 『SFJ』 4・5 課のカタカナ語の認識練習、前に習ったカタカナ語の書き練習、似ている字の見分け練習、文のディクテーション
- 5 課 『SFJ』 6～8 課のカタカナ語の認識練習、前に習ったカタカナ語の書き練習、促音・長音の書き練習、文のディクテーション
- 6 課 『SFJ』に出てくる基本漢字の認識練習、漢字語の読み練習、前に習ったカタカナ語の書き練習、文のディクテーション、速読練習
- 7 課 『SFJ』に出てくる基本的な漢字の構造認識練習、部首の認識練習、漢字語の読み練習、漢字語の入った文の読み練習、速読練習
- 8 課 『SFJ』に出てくる基本的な漢字の音訓読みの見分け方練習、送りがなの認識練習、漢字語の入った文の読み練習、速読解練習

習った語彙や文型、表現などを定着させ、長期記憶にとどめておくためには、それを口で繰り返し練習するだけでなく、文字でも確認できるようにすることが助けとなる。また、実生活においては日本の文字を読んで理解するスピードも重要であるため、初級用読解教材を使って速読の練習も行っている。

### 3-4. コース最後の発表

2003年度1学期までは、コースの終わりに口頭発表能力の達成度をみるため、様々なトピックで学生に5分～10分程度のスピーチ発表を課していたが、2003年度2学期から少しやり方を変えた。スピーチというと、学生たちは立派なことを話そうと構え過ぎてしまい、普段習っていないような語彙や文型を使ってスクリプトを作ってくる傾向があった。そのため、自分の母語で書いたものから直訳しようとして不自然な日本語になっていたり、日本人の友達に書いてもらったりしてすばらしい内容になっていても、自分では覚えきれずにたどたどしく読むだけになってしまったり、せっかくコースで学習したことが生かされているとはいえないスピーチもあった。

そこで、コース中に習った会話表現や文型を使ってどこまで自分達で楽しい会話ドラマができるかを実感させたいと思い、学生2～3人のグループで、5分～10分程度の会話のシナリオを協力して作らせ、それを覚えて発表させるというプロジェクト方式にしてみた。グループでの作業時間は約2週間で、授業としては、以下のようなスケジュールであった。

- 11月5日(水) 授業の最後に会話の発表についてやり方の説明の紙を配り、好きな学生2～3人でグループを作り、『SFJ』のL1～L12で習ったいろいろな会話のパターンを使って面白いドラマを考えるように指示する。
- 11月12日(水) グループに分かれて、日本語でシナリオを書き始める。教師に日本語をチェックしてもらいながら進める。1人1人の役の名前、会話の場所、人間関係なども決めて、タイトルもつけるように、ワープロで書いたスクリプトを提出するように指示する。
- 11月19日(水) グループに分かれて、発音の練習をする。教師に発音をチェックしてもらいながら自分のパートを覚える。小道具の準備などの打ち合わせもする。
- 11月20日(木) 会話の発表会。(ビデオ撮影)

期末テスト前のコース最後の2コマを使って、グループごとの会話の発表を行った。教師は、スクリプト作りの段階に4点、当日の発表に16点(流暢さ4点、発音4点、文法の正確さ4点、よく覚えていたかどうかのパフォーマンス4点)、計20点で評価し、最終成績の20%分にそれを当てた。会話発表はビデオに撮り、後で学生たちにフィードバックした。

会話発表のシナリオ作りのプロセスで、以下のようなことに気づいた。

- ・ 学生たちは、このようなクリエイティブなことは楽しんでやる。
- ・ 授業時間が終わって、昼休みになっても作業を続けるなど、クラス外の活動が活発になる。
- ・ グループ作りは学生の自主性に任せたところ、クラスを休みがちだったり、あまり協調

的でなかったりする学生は、うまくグループに入ることができなかった。

- ・ シナリオ作りでは、レストランの場面、店での買い物の場面などで、ウェイトレスの役や店員の役などでも、習った表現を上手く使っていた。
- ・ ストーリーの展開上、必要な場合は、習っていない表現（連体修飾など）でも自然にスムーズに導入できる。敬語なども、配役の必要に応じてよく使っていた。特に、終助詞の「ね」「よ」や「～んでしょうか」などは、イントネーションとともに指導するとよく理解できるようだった。

#### 4. 今後の課題

2003 年度 1 学期は、10 名の学生が登録したが、最後まで出席して修了できたのは 7 名であったのに対して、2 学期は 18 名という大所帯であったにもかかわらず、総じてテストの成績もよく、出席不良の学生は 1 名だけであった。よりよいクラス運営のためには、きめ細かい指導をするためのクラスの適正人数ということも考えなければならないが、学生同士のグループ・ダイナミズムの力も非常に大きいと言わざるを得ない。

そういう意味で今回の会話発表の結果をみると、1 人 1 人にスピーチをさせていた時よりコースで習った学習の成果がよく現れていると言え、グループ活動を通じて学生間のコミュニケーションが促進されたことがよかったのではないと思われる。今後も、学生の自律的な学習態度を引き出し、また学生同士が互いに協力して学習効果をあげられるような指導の工夫を重ねていく必要があると思われる。

#### 注

- (1) 正宗鈴香・福留伸子・衣川隆生・加納千恵子 (1996) 『SFJ の読み書き』(1 課～8 課) の Part.1 は、『SFJ』の対応する課に出てくる語彙を使って、ひらがな、カタカナ、漢字の言葉の読み書きを予備教育コースで練習させるために開発された副教材である。しかし、補講「日本語 1」のクラスでは、かなと易しい漢字の読みだけを扱い、書きは課していないため、漢字の書き練習の部分を除いたものを使用している。
- (2) 衣川・他 (1999) によって開発された初級用読解教材『Applied Reading 1999 年版』の中から数編を選択し、コース後半の読み書きクラスで速読練習用として使用している。

#### 参考文献

衣川隆生・加納千恵子・福留伸子・正宗鈴香 (1999) 「初級日本語学習者を対象とした読解教材の開発 素材に応じた読解技能養成を目指して」『筑波大学留学生センター日本語教育論集』14 号, 81-94